様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２９３６

研究課題名（和文）子どもの発達障碍を養育者が受容する困難さは何かー障碍受容を支える心理支援法の開発

研究課題名（英文）What are the difficulties for parent to accept developmental disabilities in children?

研究代表者
櫻井　未央（SAKURAI, Mio）

杏林大学・保健学部・講師

研究者番号：１０８０７８２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：予備調査からは「障害」概念に付随するスティグマやネガティビティを養育者側も支援者側も注視していく必要があることが明らかになった。これに基づきインタビューを行った。結果，障害理解を困難にさせる要因として「母という役割の呪縛」「子に“ふつう”を求める」といったカテゴリーが抽出できた。また、それらに対して「母役割から一歩離れる」「自分の“ふつう”を改変する」といった、より個人のスティグマに触れていくことが支えとなっていたことが明らかとなった。以上から，障害理解促進や母親同士のピア関係による支えよりも、個々人が内にある障害をのりこえるための心理的支援、よりパーソナルな支援が必要であることが考察できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　これまでの親への支援では、子ども自身の特性理解のためのペアレントトレーニングや心理教育的支援、親同士のピアサポートの重要性を挙げる研究が多かった。
　しかし本研究により、障害理解を促進することや、母親同士のピア関係による支えというよりも、個々人としてのその人が支えられる心理的支援、母役割を超えたパーソナルな支援が必要であることが分かった。一般的に現代の母親が対人緊張の高い状態にあり、ピアサポートにも安心安全を感じられていないことも重要であった。より個々の状況に応じた障害特性理解に対応していく、心理的支援が求められていると明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：　The preliminary survey revealed that both caregivers and supporters need to keep a close eye on the stigma and negativity associated with the concept of "disability".
　Based on this, interviews were conducted. As a result, categories such as "the curse of the role of mother" and "demanding "normal" from the child" were extracted as factors that make it difficult to understand disabilities. In addition, it was found that "stepping away from the role of mother" and "modifying one's 'normal'" were supportive of touching on more personal stigmas. These findings suggest that psychological support and more personalized support are needed to overcome the obstacles within each mother, rather than support through the promotion of understanding of disabilities and peer relationships among mothers.

研究分野：臨床心理学

キーワード：発達障害　養育者　障害意識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年発達障害児への支援が広く準備され社会に浸透しているが、発達障害特性が多様であるがゆえに、養育者が支援にたどりつく以前の障害受容をサポートしなければ支援内容がどれほど充実しても支援に繋がらない可能性が高い。筆者は発達障害当事者の自伝分析により当事者の自己が特異的で多様性を持つ点を既に明らかにしており、さらに本研究ではそれらの特性と障害受容をめぐって、①状態像が多様であり、幼児期～学童期に診断される発達障害を養育者が受容する際の困難さは何か、②それらの困難に対してどのような心理的援助が効果的か、という 2 点の問いを立てた。

２．研究の目的

本研究は、発達障害をもつこどもを育てる保護者が子どもの障害を受け止め、理解していくことを支援するためのアプローチ法を探索的に検討し、よりアクセシビリティの高い支援の在り方を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

〇予備調査（1）研究計画に基づき、文献の調査を行った。まず、先行研究の検討により、障害受容にまつわるいくつかの問題点が明らかになった。本分野をけん引してきた中田（1995）の研究では、発達の問題を抱えた児を育てる保護者が障害を受け止めていくには、紆余曲折を経ながら、障害の否定と肯定を繰り返しつつ 需要が進むとされており、障害受容の「らせんモデル」として多くの論文に引用されてきた。しかし、中田の論の骨子は、受容の揺れ動きにあったはずである が、後続の研究では、いわば「らせん上昇モデル」として、ある価値を受け入れ、諦め、成長していくモデルとして調査がすすんでいることが文献レビューによって明示できた。これらを発達心理学会でのポスター発表として発表した。

〇予備調査（2）上記レビューに基づき、研究者のうちにある ” 障害 ” にまつわるネガティビティをどのように抱えていくか、そのうえで、現在問題をかかえる保護者や当事者の語りをどのように引き出すのか、対話のなかで立ち現れる自己と他者の問題について検討した。研究者・協力者というスタンスを超えた、対話的自己についての個別的なストーリーを重視し、各自がどのようなスティグマやネガティビティを抱えているかも明らかにしていくこととした。これらの結果を踏まえ，質的心理学会の意見論文として投稿した。

〇本調査　予備調査(1)(2)を踏まえ、インタビュー調査を行った。2020 年度以降コロナ禍のため、計画していた対面でのインタビュー調査が進められなかった。そのため，2021 年度からは、研究の方法を改めて、オンライン・対面でのハイブリッド形式でのインタビューに切り替え遂行することとした。インタビューは，半構造化面接の形式とし，10 個のインタビュー項目を立てて，なるべく自由な語りを得られるように行った。

４．研究成果

(1)予備調査の文献研究により，本分野をけん引してきた中田（1995）の研究では、発達に問題を抱えた児を育てる保護者が障害を受け止めていくには、紆余曲折を経ながら、障害の否定と肯定を繰り返しつつ受容が進むとされており、障害受容の「らせんモデル」として多くの論文に引用されてきた。しかし、中田の論の骨子は、受容の揺れ動きにあったはずであるが、後続の研究では、いわば「らせん上昇モデル」として、ある価値を受け入れ、諦め、成長していくモデルとして調査がすすんでいることが文献レビューに よって明示できた。これらを発達心理学会でのポスター発表として発表、さらに質的心理学会の意見論文として提出した。

(2)本調査の結果

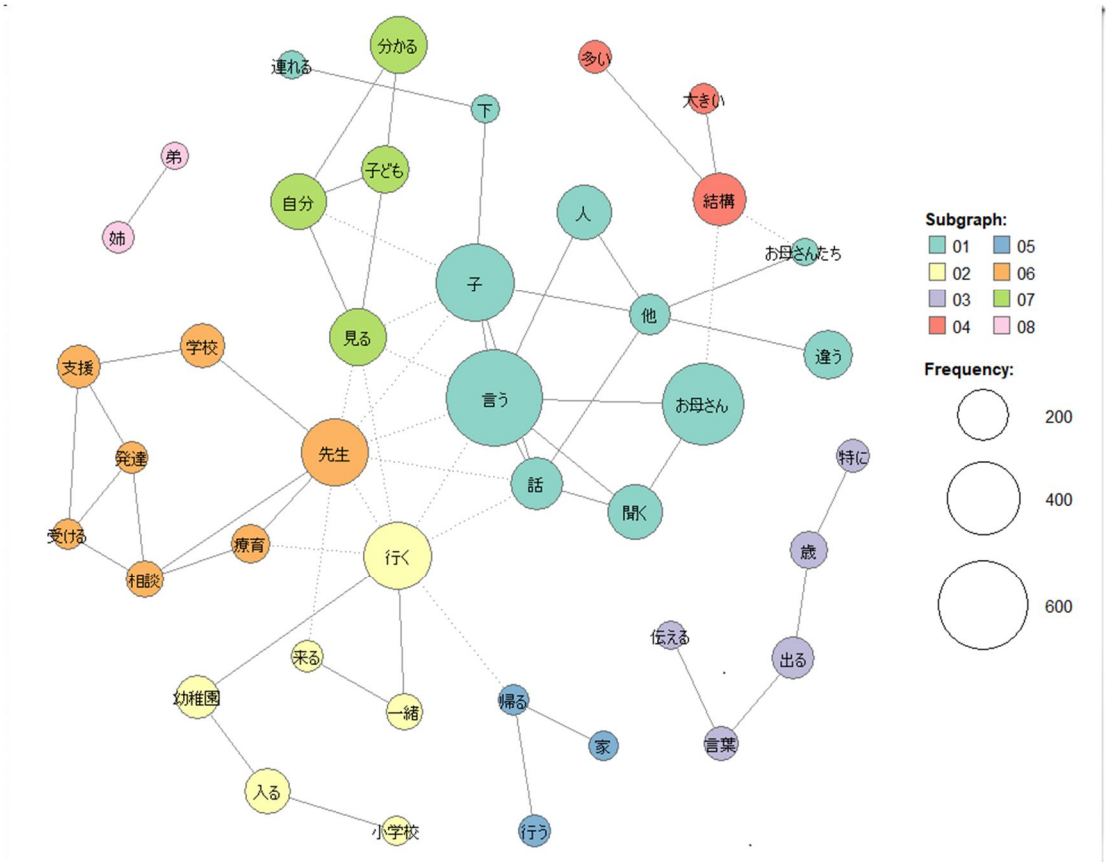
インタビューは，結果６名の調査協力者にインタビューを行うことができた。ただし、オンラインインタビューを行った場合は、回数を重ね、オンライン状況に慣れてもらうこと、語りが深まる関係性を作っていくことも行った。

協力者は全員母親であり，子どもは発達障害の診断をうけ，幼児期に療育支援を受けていたり現在特別支援教育にて支援を受けている小学生（男児 5 名，女児 1 名）であった。

インタビューデータを KH-Coder を用いて計量テキスト分析をまず行った（図参照）。その分析から抽出されたコーディングを参照して修正版グランデッドセオリー（M-GTA）を参考に質的分析を行った。

結果から，理解を困難にさせている要因として、「母という役割の呪縛」「子に “ ふつう ” を求める」といったカテゴリーが抽出できた。また、それらに対して「母役割から一歩離れる」「自分の “ ふつう ” を改変する」といった、より母個人の価値観やパーソナリティに触れていくことが支えとなっていたことが抽出できた。

これまでの支援では、子ども自身の特性理解のためのペアレントトレーニングや心理教育的支援、親同士のピアサポートの重要性を挙げる研究が多かったが、今回の調査により、障害理解を促進することや、母親同士のピア関係による支えというよりも、個々人としてのその人が支え



られる心理的支援、母役割を超えたパーソナルな支援が必要であることが分かった。一般的に現代の母親が対人緊張の高い状態にあり、ピアサポートにも安心安全を感じられていないことも重要であった。より個々の状況に応じた障害特性理解に対応していく、心理的支援が求められていることを考察した。

(3)また，(2)の成果を活かしてかかわった臨床事例について，「死んでいる対象とされたセラピストが生き延びること」(「心理臨床学研究」投稿→修正投稿査読中）として論文化した。

筆者の関わった高機能自閉症の診断を受けた学生との心理療法事例を通して、セラピストが生き延びることの意味を検討した。自閉スペクトラム様相のある人への心理的支援が検討されるとき，行動論や学習理論に基づいた療育・教育的アプローチが優先され，心理的交流を土台とした心理療法は選択されにくく，またその治療効果も懐疑的とされる。しかし本事例では，自閉スペクトラム様相のある人の特異的な感覚や寄る辺ない内的世界に寄りそい，反復する話題のなかにみえる自己の課題に対して刺激過多にならないように関わることでクライエントの心の育ちが確認できた。セラピストが死んでいる対象とされることで，クライエントは生きている自分をつかみ，外界との接触をこころみていった。外界が侵襲的すぎる自閉スペクトラム様相のあるクライエントに対して，心的皮膚としての安全を提供しながら自他未分化なありように接触すること，さらにアクチュアリティを共有できる他者としてセラピストが生き延びることで、心理療法への可能性が拓かれることについて考察した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 櫻井未央・五嶋亜子	４．巻 令和2年度
２．論文標題 子育てに不安を抱える保護者への心理的支援―コロナ禍状況からみえてくる親と子の関係性の課題―」.	５．発行年 2021年
３．雑誌名 令和2年度杏林大学地域交流推進室論集	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 櫻井未央	４．巻 12
２．論文標題 意見論文 語りのネガティビティに耐え,眺め続けること（Re:リ・コロン 再論 第11号特集 「病いの語り」再考）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 質的心理学フォーラム	６．最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 櫻井未央
２．発表標題 「障碍受容」を再考する文献的検討 主要論文の引用にみる障碍受容の語られ方から
３．学会等名 発達心理学会　第31回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

○インタビュー調査の成果より明らかにされたことを踏まえ，第21回日本質的心理学会大会にてポスター発表を予定している。 ○また、上記のせいかを踏まえ個別的な関わりをもった臨床事例について，心理臨床学研究に投稿し，現在再修正投稿中である。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関